

ポーの作品による明と暗

久保田 祐 樹

19世紀を代表する詩人の一人、エドガー・アラン・ポーは、ホイットマンと並び現代のアメリカ詩を形成した人物である。その生い立ちは数奇にして短命である。しかし、その人生の中身は、波乱であり、いくつもの恋愛、別れ、病気等と戦い、その中で幾つもの傑作を生み出した。よくポーとホイットマンは比較されるが一般的にホイットマンが陽でポーが陰だといわれる。その訳は、ホイットマンの詩は、自然や自由をテーマとし一定のリズムをとらない散文詩的で誰にでも読め、わかる詩を書く。一方ポーの方は今までの詩風を厳格に守り、音楽を感じさせるリズムと感動させられる内容である。

前半は、ポーとホイットマンの比較、中は、ポーの詩の明と暗にたずさわる恋愛のこと、そして後半はポーが、いかにして詩を書き、何を目指したのかを論評する。

またポーの人生にいったい何があり、どうしてこのようなすばらしい詩が書けるのかも触れたい。

(指導教員 中村 敦志)

ウォルト・ホイットマンの人物像

伊藤 国光

ホイットマンの詩は、当時の詩人達とは、違う所が2つあり、第1に彼のすべての詩が、一つの本にまとめられていることです。第2に型にとらわれた詩ではなく、型にとらわれることのない自由な詩であります。

彼の一生について少し述べるとすれば、ジャーナリストだったのが、あるきっかけにより詩人となり、希望に満ちていて、それが詩にも表われていたが、ある出来事に巻きこまれ、現実のきびしさを知り、それ以後、彼の詩は現実的なものと変化した。たとえば「死」というテーマにおいて、希望に満ちていた頃は、草が死んでも、また生えてくるように生のあらたな出発点となる「死」だったのが、ある出来事後は、「死」は圧倒的な力であり苦痛であった。

ホイットマンは、自分の理想を現実と結びつけようとして悩み苦しんだ詩人である。

また、彼の一生の背景には、アメリカ史上において最も変化の大きい、しかも最も希望に満ちあふれた時代である。前半は、アメリカにおける国民文学の誕生した時代であり、社会的発展では、ジャクソン大統領の政策の影響や鉄道の敷設である。後半は、南北戦争の惨禍と影響により社会墮落が最高潮に達し文化、趣味の腐敗という「めっき時代」になる。しかし、このめっき時代は、資本主義の急速な発達につながった。

ホイットマンの詩の「私自身の歌」は、自在無碍にあらゆる世界に入り込み、自己矛盾しながら最後には、虚飾と形成を排して、その世界の裸像と向き合うという精神が、私自身の歌以後の彼の詩の原型となった。

後にも述べるが、ホイットマンの詩の唯一のテクニクは、一般的ナリズムにあります。これは、ほとんど詩の中に押韻を用いず、また、定型を採った韻律や無韻律の形式も用いていない。しかも、ホイットマンの詩は単に言語的な面ではなく、観念的もしくは心理的な面から、さらに物理的な面からも、リズムは伝統的な押韻などを顧みないのである。つまり、ホイットマンは、自由詩の先駆を示しているのである。

ホイットマンは、古い秩序を守ろうとする側の人間ではなく、常に新しい未来を目指そうとする側の人間であった。しかし、理想が高いために、その分苦悩も大きかった。

(指導教員 中村 敦志)

ホイットマン哲学の世界

川 越 貴 広

ウォルト・ホイットマンは、アメリカの文明を最もよく代表する詩人と言われてます。ホイットマンが書き残した詩集『草の葉』、この詩集に展開するのは、ホイットマンの理想とするアメリカ文明の壮大なヴィジョンである。それは、アメリカの本質を解明し、さし示すものであった。しかし、『草の葉』をきびしく文学として読むためには、詩人誕生を巡る事情を、単に客観的な事実のレベルではなく、むしろ精神構造の変化にまで立ち入って深く考えてみなければならないのです。一介のジャーナリストが大詩人となったプロセスというのはしばし謎とされるどころだ。そこで、どのような事情が、彼の内部で異変とも言うべき変化を起こしたのか、事実背景の中から原因はなんだったのか調べることから始めます。

ホイットマンは、若き青年時代、政治活動が生活の中心であった。政治ジャーナリズムの世界は現実的レベルで社会の動向がはっきりと情報となって送られてくる世界である。そうした現実と非常に密接した状況下、ホイットマンは時の流れの中で、本質的なアメリカ像の実現を望み確信していた。ところが現実には、ホイットマンの夢を打ち砕く事態となって現われてきた。目先の利害だけを考え、党の執行したことは、ホイットマンの信念とは逆を行くものだった。こうした党の実体には彼は怒り幻滅し、政治が真のアメリカを導く力も意志も持ち合わせてないことを悟るのだった。この政治による幻滅は、ホイットマンをアメリカ文明の代表とまでした、また詩人として自覚するきっかけであると同時に、人生における転機となった。幻滅は彼の心理にどのような変化をとたらしたかという点、それは、我々自分自身にも当てはまることだと思うのですが、幻滅を含め、絶望、失望などのショックを受けた時のことを考えてもらいたい。人は、生きるのが嫌になるかもしれないし、どうしてこの世に生まれてきたのだろうと思うかもしれない。自分自身を問いつめてしまうものではないだろうか。ホイットマンも例外ではなかったにちがいない。それは、人間が生まれてきた以上切り離すことのできない大切なテーマに気付くことができたのです。それはまた、人生、世界、物事の根源のあり方、原理の追求がホイットマンの思想の本質として定着し、宗教的、哲学的な詩となって現われた。意味内容は難解で、この宗教と哲学がいりまじったような感じがホイットマンの詩を難しくしたのではないかと思うのです。『草の葉』に、どのようなテーマの詩が描かれているのかというと、肉体と靈魂、宇宙、輪廻転生、自己を見る目、死、などである。詩の意味内容は難解であるがゆえに想像をかきたてられる。通常の思考や経験では捉えることのできない、神秘的、超自然的なことが表現されてるからです。本論は、これらの詩を解釈することでホイットマンの哲学を追求していきます。

(指導教員 中村 敦志)

アレン・ギンズバーグとビート詩人達

—その生き方と詩—

紫 藤 広 美

第二次大戦後のアメリカでは、1950年代から1960年代にかけて、ビートジェネレーションと呼ばれた詩人達が活躍した。

その当時のアメリカは、マッカーシーの赤狩り、朝鮮戦争、ベトナム戦争などの影響により、国家の平和的イメージに国民は不信をつのらせていた。そして、その一方で、国家の異常な発達により、人々の没個性化、画一化が進んでいったようだ。ビートジェネレーション達は、そんな社会の中から脱離し、より人間らしく、自由に生きることの可能性を追求した者たちだ。

ビートジェネレーション達の中でも、最も代表的だといえる人物にアレン・ギンズバーグという詩人がいる。ギンズバーグは、1926年6月3日にニュージャージー州パターソンに生まれた。父は、ユダヤ系アメリカ人で、長い間パターソンのハイスクールの教師をしており、一部には抒情詩人として知られていたルイス・ギンズバーグである。母親は、少女時代にロシアから移民として渡ってきたナオミ・ギンズバーグである。ギンズバーグは、17歳までパターソンのハイスクールで学んだ。その後コロンビア大学に学び、卒業後はカリフォルニア大学の大学院へと入学する。そして、その数週間後に、退学してしまう。

その頃、ギンズバーグは、ゲイリー・スナイダー、ジャック・ケルアック、ローリング・ファリングエティーをはじめとする詩人達と本格的に、詩作活動を開始した。

アレン・ギンズバーグの場合、その活動は、代表的といえる長詩『吠える』に集約されているように思う。この詩は、1956年に完成し、同年、サンフランシスコの詩人、ローレンス・ファリングエティの経営する小出版社より、「ポケット詩人双書」の第四冊目として、小さくて、粗末な造本で出版された。

この詩集は、発売されて反響をよぶと共に、ワイセツだという理由により、発売禁止になり、出版社が裁判にかけられた。その裁判に当っては、『吠える』を強く支持する者たちがいたためか、詩人側の勝利となった。そして、これらの一連の事件は、ギンズバーグの『吠える』が社会に与えた影響をさらに広げたといえる。

(指導教員 中村 敦志)

e. e. cummings

—彼は詩人か？それとも画家か？—

沖 館 葉 子

はじめに。e.e.cummings—この名前を見て、みなさんはどのような印象を受けるでしょうか。正直言って、私が初めてこの名前と出会った時は、何の印象もなく、勿論、どうしてこのような書き方をするのだらうなんて、これぼっちも考えなかったのです。みなさんは気づきましたか。彼の名前がすべて小文字だということを。彼は、詩を字体で表現しようとした、詩を形で表現しようとした、根っからの画家であった！？。彼の生涯、彼の詩法を紹介しながら、彼は詩人であるのか、画家であるのか、自分なりの答えをだしてみたいと思っています。

第一次世界大戦中、彼は『巨大な部屋』という小説を書いている。これは、大戦の体験記、獄中の自伝や、反戦小説と、3つの要素を折り込んだものであるが、これこそが、彼が詩人の第一歩をふみだすきっかけとなったもののなだらう。その後、彼はフランスで、彼の詩法の要素ともなった、ダダイズムや、シュールレアリスムなどに直に接し、これらの新しい文学運動から影響を受けたと思われる、彼独特の詩法の植字法を用いて、今までにはない前衛的詩集『チューリップと煙突』を書きあげたのだった。しかし、カミングズを知っていただく上で、もう一つ心に止めておいてほしい事がある。それは、彼は画家であったという事である。画家としてのカミングズはパリで個展を開いただけでなく、1931年には、画集も出版されている。詩人であるカミングズが、画家であるカミングズにどのような影響を受けたのか。それは次を読んでいただければ、わかると思う。

ここで、彼の詩法のポイントを紹介するが、一つ目に、大文字と小文字の使い方があげられる。彼の名前にも示されているように、物の大きさや、強調こだわりを大文字・小文字に表している。又、その他にも、一つの単語をいくつにも区切っていたり、決まった段落をもっていないなど、画家的要素からの彼独特の詩法をもっているのだ。例えば" SONGS" という詩の中の、

vi

o

lets

は、すみれがあちこちにかわいらく咲いている絵を想像させる。このように、詩＝絵という公式が真にぴったりあてはまる詩人は、カミングズだけだと思っている。

最後に、みなさんはカミングズは詩人だと思いますか。それとも画家だと思いますか。私なりの答えとしては、やはりカミングズは詩人です。ここまで、イメージの広がる、目の中に焼きつく詩が書けるのは、カミングズだけなのです。

(指導教員 中村 敦志)